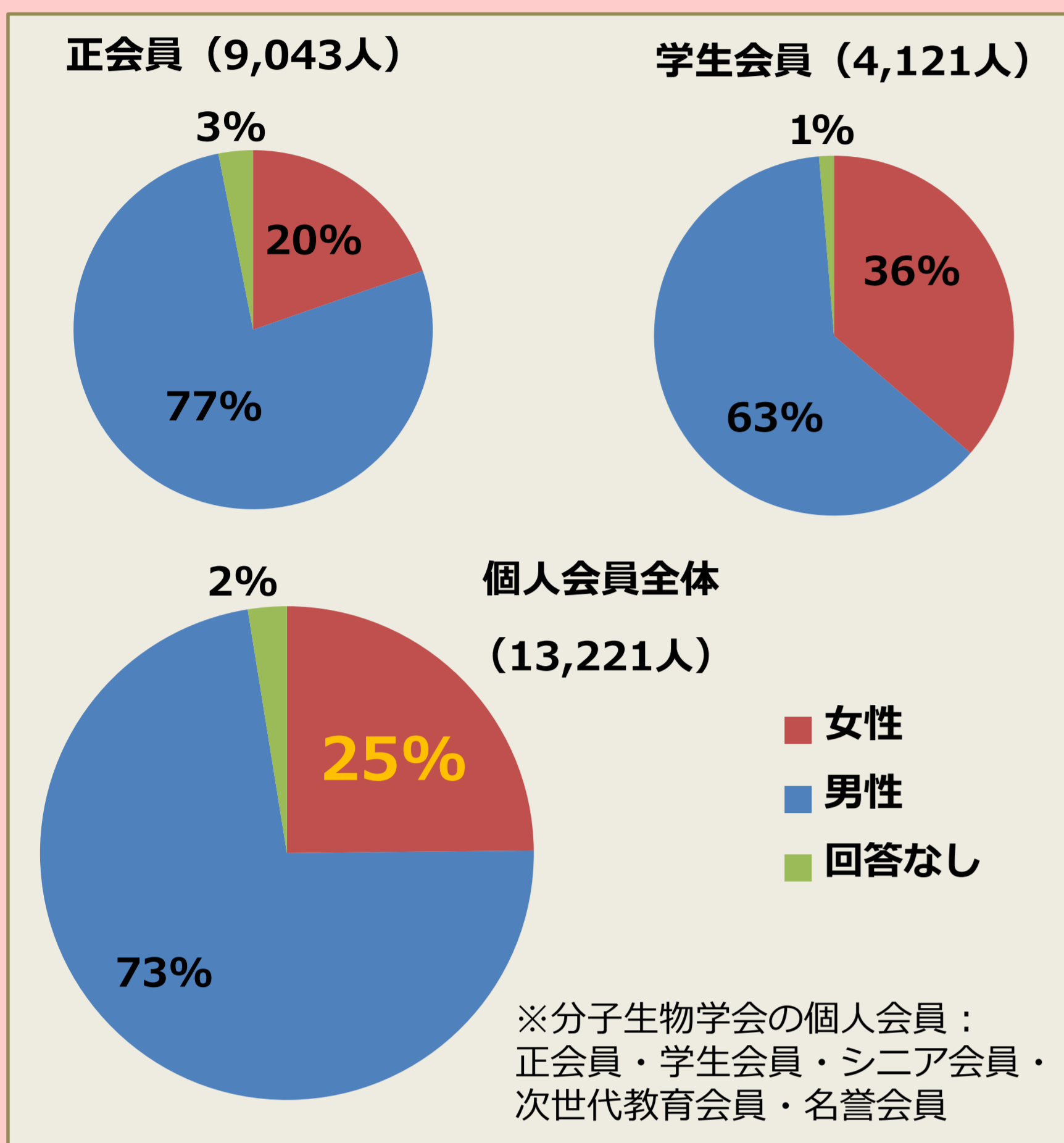


疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なく、より積極的に発表し、評価される機会を創出することだと言える。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会／当時）から継続調査を行っている。

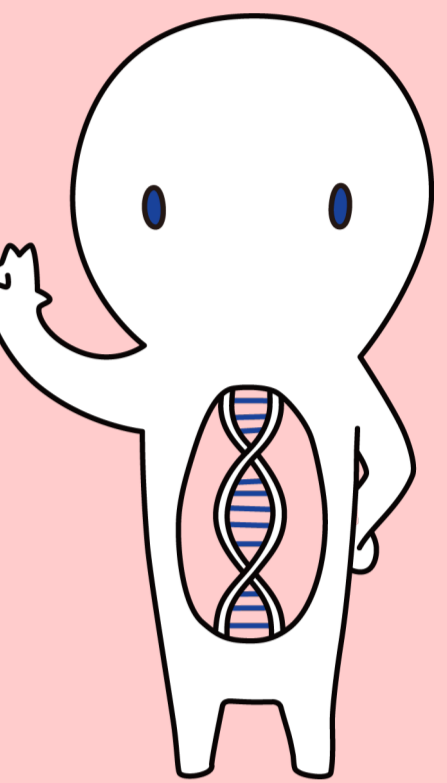
2016年の調査結果と、過去5年間から今後に向けての動向を考えた。

日本分子生物学会会員の男女比率 (2016年9月15日 現在)



2016年第39回日本分子生物学会年会発表者の属性調査

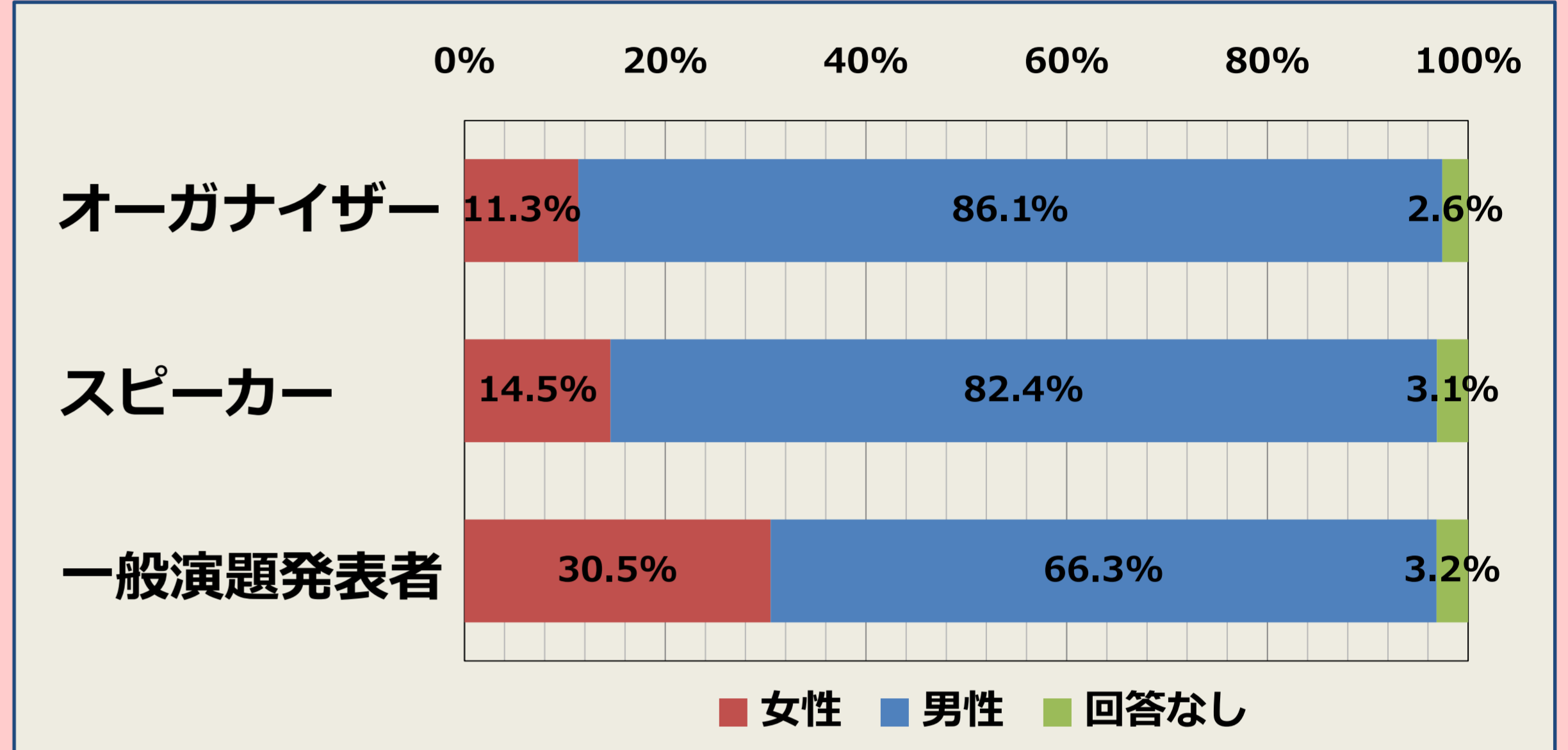
演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）し、8月3日までの演題登録者等3531名の協力により得られた回答結果である。尚、Late-Breaking Abstracts投稿分（316件）、登録後にシンポジウムスピーカーとして選択されたもの（160件）は含まない。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。



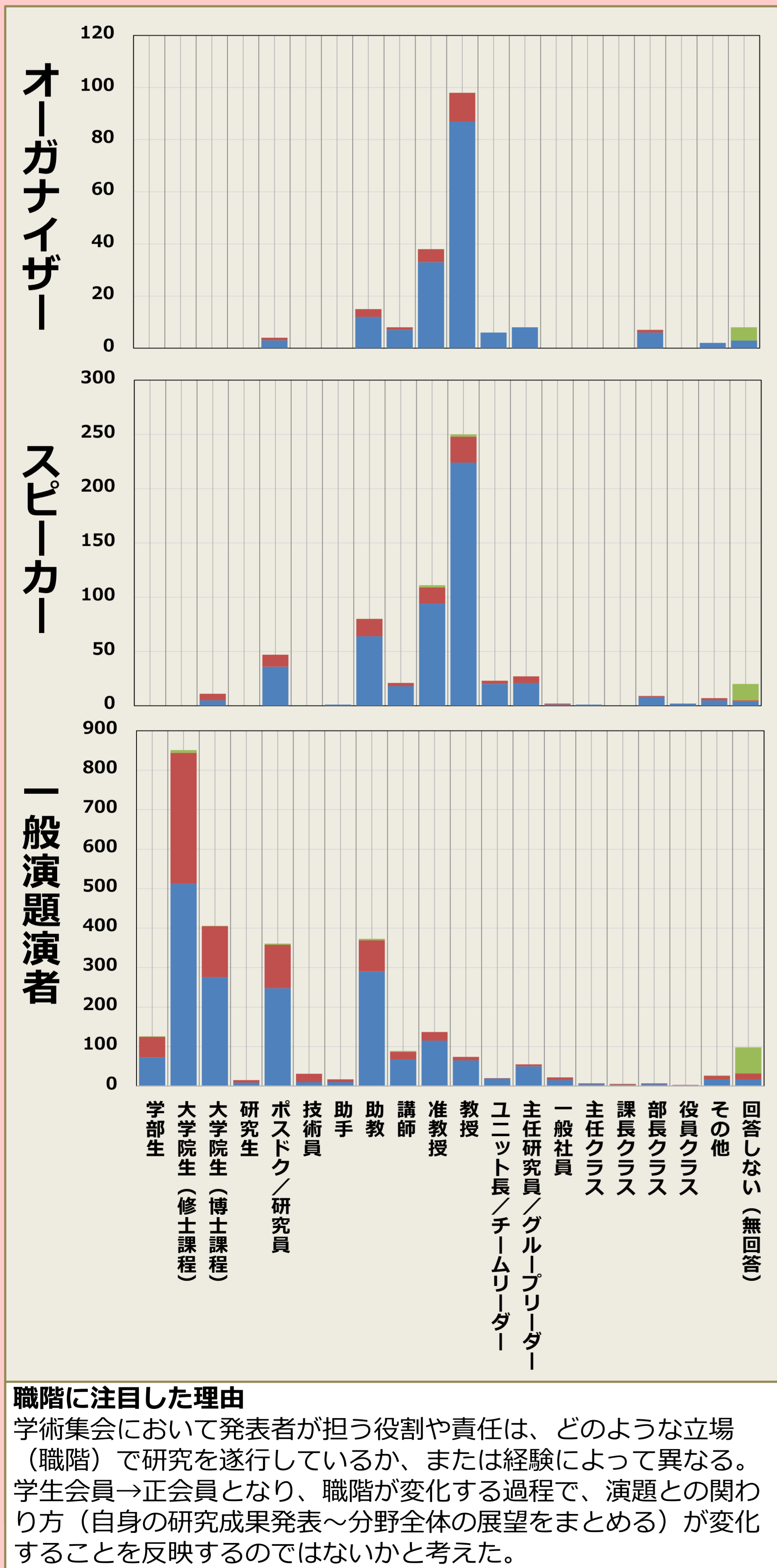
年会の発表者として、3種類の参加の仕方

●シンポジウムオーガナイザー	他薦
指定：年会プログラム委員会で検討・依頼	
●シンポジウムスピーカー*	自薦+他薦
公募：応募者の中から選抜	
●一般演題発表者**	自薦
指定&公募：オーガナイザーが検討・依頼	
●一般演題発表者**	自薦
自発的な申し込み	

* 一般演題から選抜されたスピーカー（160名）は含まれない
** LBA発表者（316名）は含まれない

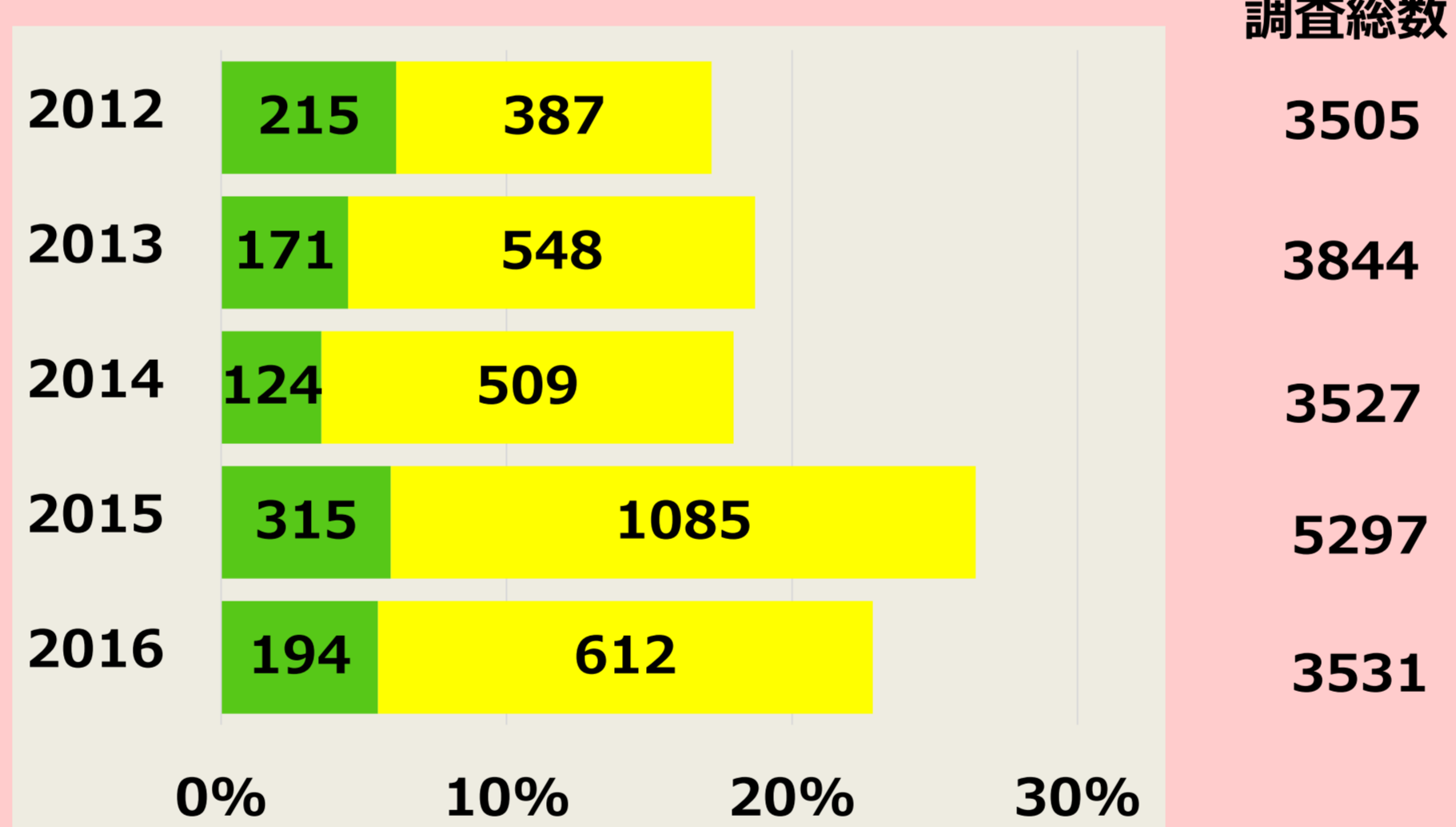


2016年発表者の職階を比較



(Q1)「機会」はどのくらいあるのか

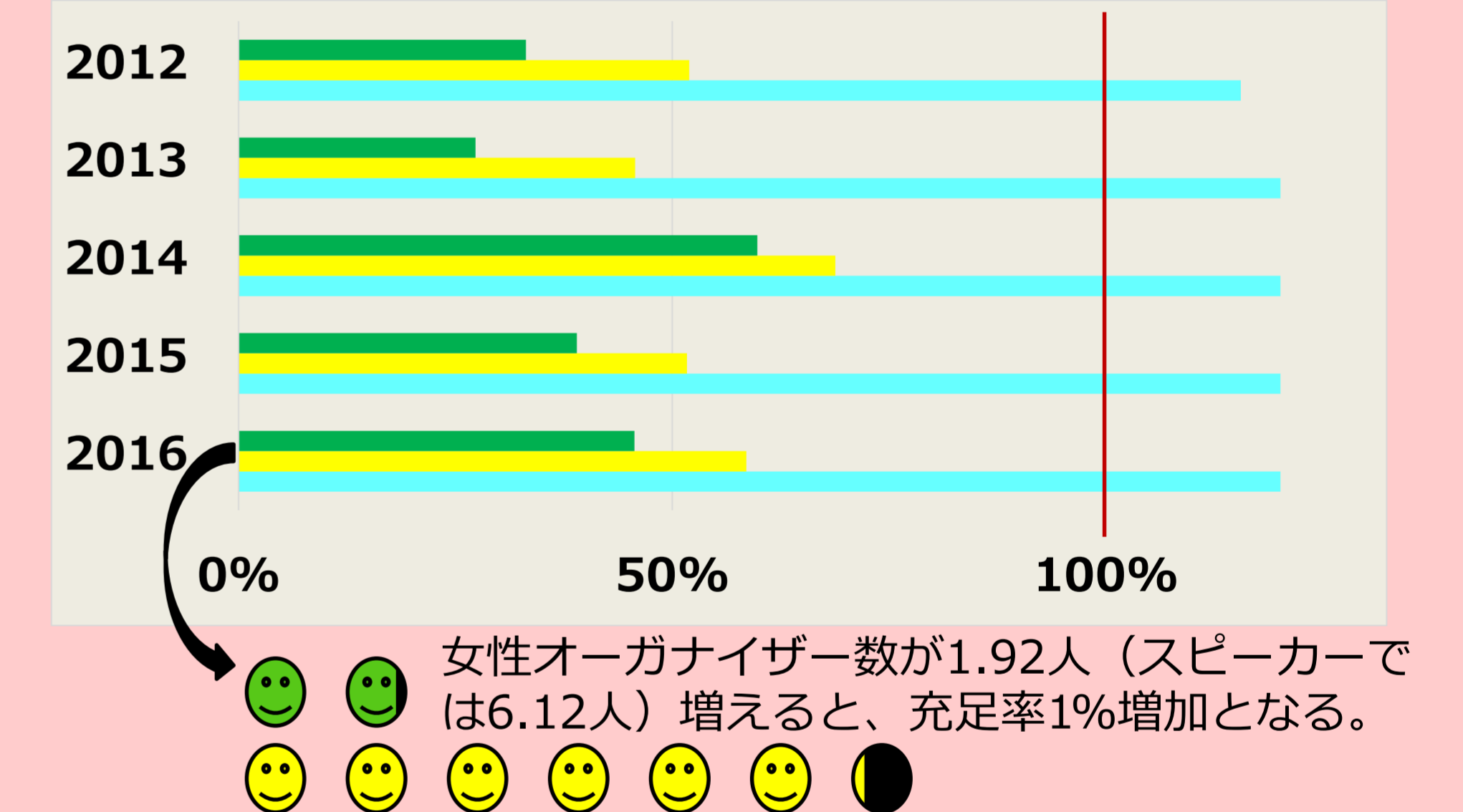
全発表者数におけるオーガナイザーまたはスピーカーとしての発表者の割合は、この5年間約17%～27%の間で推移している。スピーカーとして参加する機会自体は増加傾向にある。



(注：数字は人数。オーガナイザー+スピーカー+一般演題発表者=100%、2015年は日本生化学会との合同大会)

(Q2)その中での女性比率は適正？

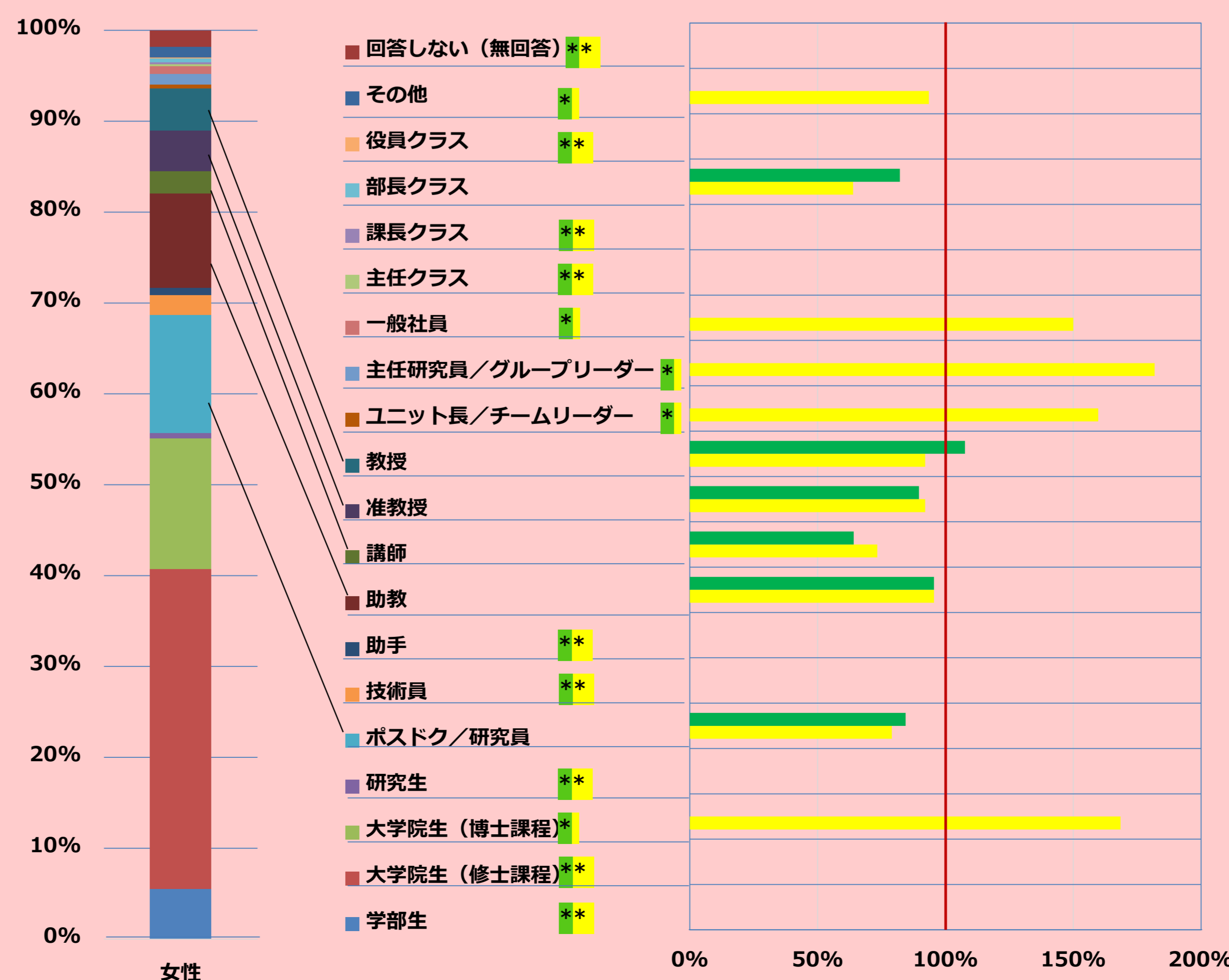
各発表カテゴリーについて、個人会員全体から期待する女性比率（約25%）と等しい状態を100%として示した（オーガナイザー、スピーカー、一般演題発表者）。例えば2016年のスピーカー612名については、女性が25%（152名）を占める場合が100%であるが、実際には14.5%（89名）なので充足率60%弱となる。



(Q3) 女性比率の増加がより期待される職階は？

2016年の調査結果より、各職階におけるオーガナイザーとスピーカーの割合に着目し、オーガナイザーとスピーカーの女性比率が、同じ職階からの発表者全体（オーガナイザー+スピーカー+一般演題発表者）における女性比率と等しい状態を100%として示した。このうち正会員が属する職階では、全体的にのびしろがある状態(<100%)であり、特にポストドク/研究員や講師でその傾向が強い。100%を超えている職階（一般社員など）もあるが実際の参加人数が少ないため、全体への寄与が小さい。

*対象となる女性参加者がいない（女性比率0%とは言いえない）



今後どのような取り組みが可能？

一般演題発表者における女性比率が個人会員全体における女性の割合を上回っているのに対し、オーガナイザーやスピーカーでは下回る傾向が続いている。しかし、男女ともにスピーカーとして学会に参加する機会自体は増加傾向にあり(Q1グラフ)、一進一退しながらも期待される方向へと変化していることも事実である(Q2グラフ)。オーガナイザー及びスピーカーの女性比率を2016年参加者の職階ごとと比較すると(Q3グラフ)、ある程度参加者数が多いのびしろがあり、全体のバランス改善への寄与が期待される職階（学生以外）が複数存在する。

さらなる改善に向けて、女性研究者の研究時間確保と出産・子育てなどのライフイベントとの両立を目指すだけでなく、女性研究者の積極性を促す必要性も指摘されている。企画における学術的な自由という大原則のもとで、研究者の性別にかかわらず、年会への一般演題発表以外での参加（スピーカー・オーガナイザー）が活性化されることは、優れた研究の発表機会としての年会の目的とも合致するのではないだろうか。

今後、年会発表における男女共同参画の望ましい形を検討するために、本調査の内容を見直しつつ、調査結果の活かし方を考えていきたい。



本当にバランスのとれた状態を実現するためには、継続的な属性調査を行い、現状把握と取り組みの方向性を検討していくことが大切です。どうぞご協力をお願いいたします。